

## スペイン内戦とヘミングウェイ (1)

—— 『誰がために鐘は鳴る』について ——

徳 永 由紀子

アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899 - 1961) は内戦下のスペインを四度訪れ、その体験をもとに作品を八つ書いた。発表順に、戯曲『第五列』(The Fifth Column, 1938) 短篇「橋にいた老人」(The Old Man at the Bridge, 1938) 「攻撃」(The Denunciation, 1938) 「蝶々と戦車」(The Butterfly and the Tank, 1938) 「戦いの前夜」(Night Before Battle, 1938) 「誰も死ななす」(Nobody Ever Dies, 1939) 「分水嶺の下で」(Under the Ridge, 1939) そして長編『誰がために鐘は鳴る』(For Whom the Bell Tolls, 1940) である。

この最後の作品、スペイン共和派のために戦うアメリカ人、ロバート・ジョーダン (Robert Jordan) を主人公とする『誰がために鐘は鳴る』は、一方では失敗作と非難されながらも、初版が七万五千部、二カ月後には約一十九万部、翌年の四月までに五十万部近くも売れたといわれ、題材を同じく戦争に取り、同じく熱烈な恋愛とその悲劇的な結末を描いて、ヘミングウェイの人気作家としての地位を揺るぎないものにした『武器よさらば』(Farewell to Arms, 1929) をもはるかに上回る、大ベストセラーとなった。その『武器よさらば』でも売れ行きは初版で三万一千部、四カ月ほどで約八万部であったといわれているから、当時のアメリカ国内における『誰がために鐘は鳴る』の、あるいは

はヘミングウェイの、人気のほどが推察される。

さてこの小説の舞台となるのは、グアダラマ山中、マドリードの北西約六十マイルのあたり、スペインのほぼ中央部である。そして時代は、一九三七年五月の末、スペイン内戦勃発から十カ月後のことである。物語はそのグアダラマ山中へ、鉄橋の爆破を命じられたジョーダンが、山岳ゲリラのアンセルモ (Anselmo) に案内されてやって来るところから始まり、その三日後、橋の爆破には成功したものの、ジョーダンは落馬をして脚に重症を負い、それでも最後の力をふり絞って、目前にまで迫った敵を独りで迎え撃とうとしているところで終わる。従って表面的には、スペインのごく限られた一地域の、しかも二年半以上にわたるスペイン内戦の内の四日間というごく短い時間の出来事しか扱われていないかのように見える。しかし実際には、例えばジョーダン自身の、あるいは他の登場人物たちの回想や独白が巧みに挿入されることによって、空間はマドリード、バレンシア、バリャドリード、サラゴサ、さらにはアメリカのモンタナ州へと広がり、時間もまた、スペイン内戦の初期、内戦前、さらにはジョーダンの子供時代へとさかのぼる。

そして登場人物といえ、それまで広い視野を欠きがちであったヘミングウェイの作品にしては珍しく、実に多様な人物たちがこの作品には登場する。ジョーダンが橋を爆破するために協力を要請するゲリラ隊の首領で、今はその面影もないが、かつては勇名を馳せたというパプロ (Pablo)、その臆病になってしまったパプロに代わってゲリラ隊をとりしきるピラー (Pilar)、ファシスト側の兵士たちに目の前で両親を惨殺された上に、自分も乱暴され、頭髪を短く刈られてしまったマリア (Maria)、ジョーダンが最も信頼を寄せるアンセルモ老人、別のゲリラ隊の首領で、圧倒的な数と武器を誇るファシスト軍を相手に、まさに孤軍奮闘、凄惨な最期を遂げるエル・ソルド (El Sordo)、ソルド

の部下でマリアに思いを寄せるホアキン (Joaquin)、父親が共和派であったというただそれだけの理由で、弟エラディオ (Eladio) とともに共和派になった闘牛の好きなアンドレス (Andres)、ジョーダンのよき相談相手であるロシア人ジャーナリスト、カルコフ (Karkov)、さらにはジョーダンにとっては敵であり、エル・ソルドと彼のゲリラ隊を全滅させるファシスト軍のベルレンド (Berrendo) 中尉、あるいはまた、ジョーダンが爆破する橋を守る、名もない歩哨たち等々、『誰がために鐘は鳴る』という小説の持つ不思議なエネルギーは、彼ら一人一人から発せられていると言えるのであって、ジョーダンの任務遂行の物語というよりもむしろ、スペイン内戦を背景に彼ら一人一人が繰り広げる大小様々なドラマにこそ、この小説の魅力があるといっても過言ではない。

従って、『誰がために鐘は鳴る』が失敗作であるとするならば、その原因は専らジョーダンにあると言えそうである。他国の人民のために自己を犠牲にするという、その英雄的な行為にも関わらず、今述べた他の人物たちと比べても、ジョーダンはどこか精彩を欠いている。いやむしろ、彼が立派なことを言えば言うほど、英雄であろうとすればするほど、彼の存在は浮き上がってしまう。常にどこかちぐはぐな印象を読者に与えてしまうのである。

なるほど彼はゲリラ隊に混じっても何ら不自然な点がないように、一応もつともらしい設定がなされている。彼はモンタナ大学のスペイン語講師であって、過去十年間にすでに何度もスペインを訪れ、それもバスク地方、ナバラ、アラゴン、ガリシア、二つのカスチリア地方、エストレマドゥーラと、スペインのあちこちを訪れ、スペイン案内のような著書もある。言葉にも土地にも通じていて、だからスペイン人たちからすぐに信頼される、というわけである。まだその上に、何度か夏に土木工事や道路建設の仕事をした経験があり、火薬の扱いにも慣れているということにもなっている。

ところがそれ以上のこととなると、これはよく指摘されることであるが、必ずしも明瞭であるわけではない。アメリカ人であるジョーダンがスペイン内戦に何故参加したのか。彼にとって他国の戦争であるスペイン内戦とは一体何であったのか。こういった肝腎なことはついに最後まで、曖昧なまま終わってしまう。例えば確かに彼は次のように言う。

この戦いが、自分の愛する国に起こったがゆえに、これに参加したのだ。彼は共和主義の信奉者だった。もし戦いに敗けたら、共和主義を信奉するこれらの人々に、どんな悲惨な生活が訪れるかわからないだろう。この戦いがはじまってから、彼はスペイン共産党の訓練を受けた。このスペインでは、共産党が戦争遂行のために、最善の訓練と、もっとも頼りになり、もっとも分別のある人間を提供した。彼は、戦いがはじまっていろいろ、共産党の訓練をとり入れた。共産党は戦争の指導という点では、彼にとって、尊敬できる計画と訓練をもった、ただ一つの党であったからだ。(一六三)

ところがそのすぐあとに、「では」と続けて、彼の「政治的意見はどのようなのか？」と自らに問いかけ、そして「いまのところ、なんにももっていない」と「ひそかに」思うのである。

一体これはどのように考えたらよいのだろうか。内戦勃発後いち早くスペインに駆け付けたといいながら、ジョーダンの内戦参加の動機はこれではあまりにも漠然としているし、政治意識もまたあまりにも低い。愛するスペインのためにと言うなら、それならそれでジョーダンがいかにスペインという国を、そしてスペインの人たちを愛しているかが読者にも理解されなければならぬはずであるが、『誰がために鐘は鳴る』には、もちろん状況は異なるとはいえ、

例えば『日はまた昇る』(The Sun Also Rises, 1926)において、主人公ジェイク・バーンス (Jake Barnes) が車でフランスの田園地帯を抜けて、いよいよスペインに近づきにつれて覚えるような解放感も充実感も読み取れない。読み取れるとしたら、それはジョーダンというよりはむしろヘミングウェイ自身の、スペインに寄せる限りない愛着であろう。

あるいはまた、物語の最大の焦点であるはずの、橋の爆破というジョーダンの任務それ自体も、実はきわめて不明瞭である。「きわめて複雑にして見事な作戦」の一環であって、「あの橋が爆破されれば作戦は成功する。セゴビアを占領できるのだ」(六)とゴルツ (Golz) 将軍は力説し、しかも爆破は味方の攻撃の開始直後、それより早くても遅くてもいけない、という難しい条件をつける。ところが結局読者にとって手がかりとなるのはこのゴルツ将軍の言葉だけであって、作戦の目的も、橋の爆破の意味も重要性も、読者を十分に納得させるほどのものではない。それどころか、ここでもまた不可解なことに、もしかしたらそのため命を失うかもしれないジョーダン自身が、作戦についてなおも詳しく説明しようとするゴルツ将軍を遮ってしまうのである。「いや、かえって、うかがわないほうがよさそうです」(七)、と。

「考え」ない、しかし「行動」はする、というのがどうやらジョーダンが一貫して取るうとしている態度のようである。彼は自分のことを称して、「思索家」ではなく「爆破屋」だと言い、「考えるな」、「考えるな」と繰り返し自らに言い聞かせる。難しいことは考えない、抽象的なことは考えない、面倒な理屈は考えない、それよりとにかくまず行動しよう、というわけだ。しかし、例えばヘミングウェイの初期の傑作「二つの心臓の大きな川」(Big Two-Hearted River, 1925)におけるような、「考え」ないということ自体に積極的な意味があった、いやむしろ、「行動」する

ことがすなわち「考え」ることであつた場合と違って、戦争の中でも特にイデオロギーの戦争といわれるスペイン内戦に、「考え」ない主人公を参加させるというのは、やはり不自然、不適當といふべきであらう。

「考え」ない、「行動」はする。しかもただの行動ではない。それは危険を伴う、勇敢な、英雄的な、他人から称賛されるような、立派な、「行動」でなければならぬ。いわば行動という華々しい外側だけが、中身を伴わないまま独り歩きをしてしまったような格好である。ジョーダンの存在感が希薄であるのも無理はないのである。

ジョーダン自身、こういった自らの不明瞭さ、中途半端さを無意識のうちに承知しているかのように、ゲアドラマ山中に到着してからというもの、彼は迷つてばかりいる。まるで彼は、自分の置かれている不安定な状態から逃れようと、一生懸命、無理にでも自分を納得させようとしているかのようなのである。残念ながらこのことは、ジョーダンの「行動」の人としての印象を、弱める結果となつてしまつている。主人公であるから当然といえば当然であるにしても、ジョーダンの独白の多さ、そして長さは、確かに中島顕治氏も指摘するように、「わずか四日間の出来事を語る物語がこれほど大部になつたことの一因<sup>1)</sup>」なのである。

そして、スペイン人民のために、共和主義のために、「みんな」のためにとつて言うジョーダンに、私たちが今一つ戸惑うことがあるとすれば、それは、『武器よさらば』の主人公フレデリック・ヘンリー (Frederic Henry) と彼の断絶である。もちろんフレデリックを基準にしてジョーダンを測るべきではない。二人は別々の人間だ。しかしそれでも私たちが驚かせるのは、二人があまりにも違うということである。他国の戦争に参加する、という点では確かに二人は共通している。しかもいわゆる戦闘員ではない、という点も同じである。フレデリックは救急車の運転手、ジョーダンは「爆破屋」である。そして二人とも戦争の最中に恋愛する。フレデリックはイギリス人キャサリン (Catherine)

と、ジョーダン①はスペイン人マリアと。しかもこの恋人たちには、どちらか一方が死ななければならぬという運命が待ち受けている。フレデリックはキャサリンを失い、ジョーダンはマリアを残して独り死ななければならぬ。二人の置かれている状況はきわめて類似しているかに見える。しかし問題は、『誰がために鐘は鳴る』においてジョーダンが命を賭けようとしているものは、他でもないフレデリックがすでに『武器よさらば』において一度は捨てたもの、拒絶したものだということである。

例えばミラノの病院から再びゴリーツァに戻ってきたフレデリックは次のように言う。戦争は戦争でしかない、というフレデリックの導き出した一つの結論が表明される有名な箇所である。

神聖とか、光栄とか、犠牲とかいう言葉や、むなし、といったような表現には、ぼくはいつも当惑を感じるのだ。そういう言葉は、もう久しい以前から、何度も聞いたり読んだりしたことがある、ときには雨のなかに立って、ほとんど声も聞かえない遠くから、ただそのわめかれた言葉だけを聞いたことがあったし、また、ビラ貼りたちがほかの布告書の上に乗ったばかりつけてゆく布告書の文面に、それを読んだことがあった、だが、ぼくは神聖なものなどにも見たことがなく、光栄ありといわれるものに光栄のあったためしはなかった。そして犠牲とはシカゴの屠殺場のようなものなのだ、ただ、肉を埋めてしまうはかに手がない、という点がちがっているだけの話だ。聞くにたえない言葉の数はおびただしく、あげくのはてにはただ場所の名前だけが威厳をもつことになってしまう。ある種の数字も同じだし、ある種の日付もそうだ、そして、これらと場所の名前だけが、いって意味のある唯一のものにはかならぬ。光栄とか、名誉とか、勇氣とか、神聖といった抽象的な言葉は、具体的な村の名前や、道路の番号や、川の名前、連隊番号、それから日付などに比べてみれば、猥褻だ<sup>②</sup>。

この二日後にはイタリア軍の総退却が始まり、その途中でフレデリックは戦線を離脱、彼の人生が大きく変わっていく、ここはその転換点とでも呼ぶべき箇所でもあって、「神聖とか、光栄とか、犠牲とかいう言葉」を拒否し、いや「むなし」という言葉さえも否定してしまうフレデリックにとっては、抛り所にできる確かなものといえば、もはや「場所の名前」とか、「ある種の数字」とか、「ある種の日付」とかいったような、きわめて単純であまりにも明明白白な具体的な事実だけしか残されていないのであって、しかも、抽象的な言葉を空虚だ無意味だというのではなく、「猥褻だ」という、その拒否の仕方がまたヘミングウェイ独特のものであり、すなわちそこに働いているのは知性というよりはむしろ感覚であって、さらにはまた、そう言い切ってしまう、あるいは言い切ってしまう、このある意味での潔さがこれまでのヘミングウェイの主人公たちの身上でもあった。そしてその戦線離脱も、戦争を否定する勇敢な行為だと肯定的に見るか、単なる身勝手な逃避だと否定的に見るか、当然意見は分かれるにしても、フレデリックはここで戦争という、言わば「全体」のためには「個」の生活も「個」の意志も滅却することを要求される世界を捨てて、キャサリンとの愛という、百パーセント「個」の世界を選んだはずである。「全体」の意志を捨てて「個」の意志を取り、そして「宇宙」の意志に敗れたのがフレデリックであった。それが、何故またジョーダンは戦場に戻って来て、自己犠牲だの、勇気だの、主義だのと言わなければならぬのだろうか。

しかしここで、それでは完全にジョーダンとフレデリックとの間は断絶してしまっているのか、二人は全く相反する生き方をするのか、という点、それが必ずしもそうではなく、ある意味ではジョーダンはやはり間違はなく、フレデリックの血を分けた弟なのである。



このことが明確になるのは、一つの山場とも言えるある事件を通じてである。三日目の明け方、洞窟の外で寝ていたジョーダンには、「左胸の上に、まっ赤な徽章をつけた」(二六五)騎兵が一人近づいてくるのに気が付き、ほとんど反射的に彼を撃つ。その後、撃たれた騎兵の仲間が四人、彼を探しに来たり、エル・ソルドのいる山の方で断続的に銃声がしたり、と緊迫した場面が続いたあと、その日の午後になって、ジョーダンは死んだ騎兵がポケットに入れて持ち歩いていた書類と手紙とを読んでみる。書類から、彼は二十一歳で、ナバラのタファアラという小さな町の出身で、鍛冶屋の息子であるということに加えて、カルロス党員であり、第N騎兵連隊の所属であり、イルンの戦いで負傷したという、言わば彼の兵士としての公的な面が明らかとなる。それに対して妹や許婚の手紙からは両親のことや、故郷のこと、同じタファアラの出身者で負傷したり戦死したりした者のこと、彼に対するそれぞれの想いなど、今度は彼の私的な面が明らかとなる。すなわち、二人の兵士を単にファシスト、単に敵としてしか見ていなかった間には見たこともなかった、あるいは見えては来なかった、その兵士の一人の人間としての顔を、ここでジョーダンは、はからずも見てしまったということになる。

この妹や許婚の手紙がジョーダンに強い衝撃を与えたことは明白であって、その証拠に彼はもはやそれ以上他の手紙を読む気をなくしてしまう。この兵士だけではない、彼がそれまでひとまとめに敵と呼んで殺してきた兵士たち一人一人に、家族があり、恋人があり、友人があり、生活があり、喜びや悲しみがあり、誇りがあり、それぞれの人生があったという事実が、彼に重くのしかかり、戦争という場における「全体」の意志と「個」の意志とをめぐって、彼は自問自答を繰り返す。「全体」の意志に従おうとすれば「個」の意志を捨てなければならない。「個」の意志を貫こうとすれば「全体」の意志と衝突する。おそらく長い間彼の内部でくすぶっていた、そしてそれが頭をもたげる度に、

「考えるな」と自らに言い聞かせてきた疑問が、ここへ来て明確な形を取ったと考えるべきだろう。

従って、ジョーダンがこの騎兵を撃った時に、騎兵の左胸のまっ赤な徽章が見えるほど、あるいはまた逆に騎兵がこちらを見たとわかるほど、二人の距離が接近していたことは象徴的である。しかも瞬間的にもせよ、ここに「見る」、「見られる」という関係が成立していることもきわめて重要である。ジョーダンが彼を「見る」というだけではなく、逆に彼から「見られる」ことによって、彼からの視線を受けることによって、ジョーダンは相手の存在をさらに鋭く感じずにはいられないからだ。そしてその後さらに、四人の騎兵が文字どおり目の前に現われた時に、彼は次のように思う。

こんなに近くで敵を見ることなんて、めったにあるものではない……。軽機の銃身から一直線のところに、こんなふうに敵を見るなんてことは、あるものではない。いつもだったら、照尺を立てるくらい離れていて、敵のからだは一寸法師くらいにしか見えないし、照準標を、うるさく上下しなければならぬのだが――。さもなければ敵が、駆け足でか、のろのろ歩いてか、こっちへやってくるのを、こちらは山の斜面から火器をパチパチやったり、どこかの街路を遮断したり、建物の窓を銃眼に使ったりするだけなのだが。あるいは遠くの道路を行進する敵兵を見るだけなのだが。ただ、汽車に乗った敵の場合、こんなふうに近くから見ることもあった。そういうときだけは、今みたいに近くから見られるけれど、そんなときなら、こんな四人くらいの敵は、ばらばらと一気に片づけてしまうのだが――。しかし、こんなに近距離で照星ごしに見ていると、まるで普通の人間の二倍にも見えた。(二八一)

「こんなに近く」で彼は敵を見たことがなかったものであって、いや実際には見たことがあったとしても、これまでは機械的に彼らを撃ってきたのであり、これほど新鮮な驚きを持って見たことはなかったものであって、言わば彼はこの時初めて遠景としてではなく、近景として戦争を見たのである。いつもなら豆粒ほどの大きさにしか見えない敵が、ここでは「普通の人間の二倍」の大きさに見えているということは、ジョーダンの内部で「個」の重みがそれだけ増したことを物語っている。二通の手紙を読む以前にすでにジョーダンは、「個」の世界に一歩足を踏み入れていたことになり、その意味では彼は二通の手紙を読むべくして読んだのであり、敵の兵士の「個」の世界を、実は「はからずも」見たのでも何でもなく、見るべくして見たのだと言える。

しかしこれは、ジョーダンの突然の変化というよりはむしろ、おそらくはそれまでジョーダンの心の奥深くに眠っていた「個」の意識が、この事件をきっかけに目覚めたと考えるべきであろう。フレデリックの「個」への固執は実は、「全体」の世界のためには「個」を犠牲にすることを厭わず、「個」の世界よりも「全体」の世界を優先させるかに見えたジョーダンにも、確実に受け継がれていたのである。ここでジョーダンの設定を今一度詳しく見てみる必要があるだろう。

まずジョーダンの任務であるが、彼は戦争に参加しているとはいっても、戦闘員ではなく「爆破屋」である。一種のチームプレイである戦争の中で、彼の任務はむしろ単独行動の色彩が強い。そしてただ任務の上からというだけではなく、彼はとかく独りになりたがる。同じ「爆破屋」のカシュキン (Kashkin) という男を撃ったのも彼である。これはもちろんやがてジョーダン自身が迎える結末の伏線になっているのであるが、二人で鉄道を爆破した折に、本人の頼みとはいえ、従って厳密な意味では殺人とは言えないにしても、重傷を負って動けなくなったカシュキンをジョー

ダンに撃つ。彼は自分の手で、言わば「仲間」を撃つたことになるのであって、そのカシユキンの代わりに、彼は文字どおり単独でグアダラマ山中に入ったのである。さらに最後の場面でも、中島顕治氏の指摘にもあるように、脚に重傷を負って動けないというものの、パプロたちとともに逃げようと思えば十分に逃げられたにも関わらず、さらには一緒に残るというマリアをも拒絶して、独りその場に留まって敵を待つのである<sup>③</sup>。

そしてここでもう一度よく思い出してみるなら、フレデリックの場合も、確かに彼は前線には赴くが、彼もまた実際の戦闘に参加したのではなく、臼砲弾で脚に重傷を負ったと言うけれど、それも戦闘中のことではなく、仲間の運転手たちと食事中のことだったのであり、従って、フレデリックにしろジョーダンにしろ、結局のところ彼らは二人とも戦争に参加し、戦争がいかなるものかも知り、生命も落としかねないような危険な体験もし、言わば戦争というものに限りなく近づきはするが、しかし結局は内部の人間にはなり得ず、あくまでアウトサイダーであって、「全体」に属する「個」ではなく、「全体」の外側に位置する「個」なのである。

彼ら二人が他国の戦争に参加しているアメリカ人であるということもまた、彼らのこの位置をよく物語っている。言葉为例に取ってみても、アメリカ人フレデリックはイタリアでイタリア人とイタリア語を、あるいはアメリカ人ジョーダンがスペインでスペイン人とスペイン語を話しているのであるが、作品の上ではそれが英語で再現されている、言い換えれば英語に翻訳されていることになっていて、読者にとっては言わば吹き替え映画を見ているような格好になっているのである。しかも「誰がために鐘は鳴る」においても何度か、これは英語で書かれてはいるが、実際にはスペイン語で話されているのだということが、読者にも喚起されるのであって、では何故わざわざこのような煩わしい状況を作らなければならないのかと言えば、一つにはそれはヘミングウェイの本当らしさへのこだわりの現われと考

えられるが、それはまた、イタリア人の中の、あるいはスペイン人の中の、たった独りのアメリカ人であるというところを、本人にも読者にも意識させるためではないだろうか。自分は独りだけ回りの人たちとは違う。たとえその差異を限りなくゼロに近づけていくことができたとしても、事実例えばジョーダンなどはスペイン人の中にいて外国人であることを忘れるとは言うが、それでも最後にはどうしても微妙な差異が残る。それが否定的に捉えられているのではなく、そのあるかないかの微妙な差異にあくまでもこだわることによって、「全体」の中にどうしても埋没することの出来ない「個」というものが意識される。この「個」であることを強く意識させられるような状況に登場人物たちを置くことを、言い換えれば、登場人物が自らを差異化することを、どうやらヘミングウェイは好むようである。

従って『武器よさらば』において、キャサリンはどうしても英語の通じるイギリス人でなければならなかったのであって(アメリカ人ではなかったところが興味深いところであるが)、この二人が次第に回りから孤立して、ついにはほとんど現実の世界から遊離した二人だけの別世界を形成していくことは、周知の通りである。それとは対照的に、スペイン語しか理解できないマリアは、最終的にはジョーダンと行動を伴にすることは許されないのであって、ジョーダンはマリアにさえも「一つのものになっても、おたがい、もとの自分であったほうがいい」(二六三)と言う。ヘミングウェイの登場人物たちは、あくまで「個」であろうとするのである。

さらにまたジョーダンが協力を要請したのが山岳ゲリラ隊であったということも忘れてはならないだろう。アンヘル・キャペラン(Angel Capellan)によれば、ゲリラはスペインの歴史と伴にあるといっても過言ではなく、ゲリラと言う言葉自体がもともとスペイン語であって、いかなる圧力にも屈することなく、いかなる組織にも属さず、いかなる組織をも作らず、誰に忠誠を誓うでもなく、誰に命令されるでもなく、ゲリラとはスペイン人の「肉」であり、「魂」

であり、スペインの本質そのものなのである。実際スペイン内戦時においても多数のゲリラ隊が活躍したということであり、ヘミングウェイも恐らくその事実を踏まえてパブロたちを登場させたと思われるが、ジョーダンに橋の爆破という任務を与え、しかもそのうえゲリラたちにその協力をさせたということは、意識してかせずしてか、ヘミングウェイがあくまで「個」を行動の単位に選んでいたということに他ならない。なるほどパブロの率いるゲリラ隊は、年齢も出身地も異なる面々が団体行動を取ってはいる。彼らの間には暗黙のルールもある。上下関係もある。しかし「戦う気持はあるだが、軍隊にはいりてえとは思わねえだな」(二二六)というラファエロ(Raphael)の言葉に端的に示されているように、一人一人が孤独な闘士である彼らは、集団としても「個」であって、例えば同じ一つの目的のためには共和軍に協力はするが、決して共和軍に忠誠を誓うわけではなく、この「全体」の一部になることを拒否して、頑固なまでに全き「個」であることを主張する彼らの生き方に、ヘミングウェイは自らの理想を見ていたのかもしれない。

そして再びここで橋の爆破というジョーダンの任務について考えてみるなら、この橋の爆破というジョーダンの行動そのものが実は、「全体」の世界と「個」の世界との間に引き裂かれたジョーダンの分裂した自我を最もよく物語っているのではないだろうか。橋とは、言うまでもなく二つのものを結ぶものである。と同時に橋とは、二つのものの乖離をも意味するものである。すなわち橋とは、分断への契機を内包しつつ、二つの本質的に相異なるものを結びつけるものである。従って橋を爆破するとは、二つの異質な世界の結合を破壊することに他ならず、それは言い換えれば、二つの異質の存在である「個」と「個」との結合を阻むことであり、あるいはそれは、エピソードに掲げられた、しかも『誰がために鐘は鳴る』というこの小説の題名もそこから取られた、ジョン・ダン(John Donne)の詩が説く、

人類の「連帯」を否定することに他ならない。ジョーダンにとって橋とは爆破しなければならないものである。橋の爆破は、「全体」のために彼が果たさなければならぬ任務であるが、しかし同時に実はその任務は、「個」と「個」との連帯の困難を、あるいは不可能を、いやむしろ連帯の拒絶を示唆している。何人も一つの島ではない、誰もが大陸の一部だと、ダンの詩は歌う。それに対してジョーダンは行動そのものによって、彼自身はおそらく無意識のうちに、人は誰もそれぞれが孤立した島だと、それが人間存在のあり方だと、橋は不要だと、主張しているのである。

しかしそのダンの詩もまた、人類の連帯を歌ったものではありながら、そこに鳴っているのは実は甲いの鐘であって、人類は死を通じてしか連帯することができないという悲観的な意味合いを持ったものであるということも、忘れてはならないだろう。そしてその意味では確かにジョーダンも死ぬことによって連帯を実現したと言えるのであるが、逆に言えば、ジョーダンはどうしても独りで死ななければならなかったのであり、ヘミングウェイの世界においては、文字どおり肉体の死を通じてしか、「個」は「全体」の一部にはなり得なかったのであって、ヘミングウェイにとってはいかに連帯が困難なものであったかが、このことから窺えよう。

しかもこの場合ジョーダンは、彼の計画を阻止しようとしたパプロが、爆破に必要な器具類をひそかに持ち出して谷底に投げ捨ててしまったために、近代的な科学に頼らないきわめて原始的な方法で、橋を爆破せざるを得なくなる。これはヘミングウェイの最も初期の作品の一つである短篇「インディアン・キャンプ」(Indian Camp, 1925)において、主人公ニック(Nick)の父親がナイフと釣針と釣糸を使って帝王切開の手術をしたのと状況は同じであって、この意味でもジョーダンはやはり昔ながらのヘミングウェイの典型的な登場人物なのであるが、彼は文字どおり自ら手で、「連帯」の絆を断ち切ってしまうことになるのである。

そして父親と言えば、「インディアン・キャンプ」において、インディアンの赤ん坊の父親が自殺したように、ジョーダンの父親もまたピストル自殺をしたという設定になっている。ジョーダンはこの父親を臆病者だと決めつけ、むしろもう一代前の、南北戦争で活躍した勇敢な祖父に自己を同一化しようとする。このジョーダンの先祖返りをもってアメリカ的な美徳の再確認、アメリカの過去の再評価であるとする批評家もいるが、しかしここでもまた繋ぐものとしての橋が欠落しているのであって、祖父とジョーダンとの間を繋ぐべき父親は、まさしく自らをピストルで破壊してしまっているのである。

このように見てくると、ヘミングウェイの登場人物たちは本質的に「個」の世界の住人であって、ジョーダンもその例外ではなく、スペイン人民のためにと勇んで内戦に参加したはずの彼も、「全体」の意志と「個」の意志との矛盾に苦しみ、二つの世界の間で自己分裂に陥らずをえなかったのである。従って、小説の冒頭で彼がゲリラのアンセルモに導かれて、道なき道をグアダラマ山中奥深くに分け入って行く姿は、まことに象徴的であると言わなければならぬ。「全体」の世界をあとに、彼はいよいよ深く「個」の世界へ入り込んで行くのであって、その三日後、アンドレスに託されたジョーダンの手紙が、なかなか軍の中央部にまで届かないことに、いかに彼が「全体」の世界から遠く離れてしまったかが窺えよう。

しかし一方で、ジョーダンがフレリックの狭苦しい「個」の世界から、もっと広い世界へ抜け出そうと試みたこともまた否定できないことである。確かにジョーダンその人には、その試みはあるいは実らなかったかもしれない。しかし、先に述べた人物の多様性やあるいは一人称視点から三人称視点へという視点の変化に、それは確実に現われているのであって、ジョーダンの物語を複数の物語のうちの一つにしてしまうような、あるいはジョーダン自身を主人



公というよりはむしろ、登場人物の一人にしてしまうような、スケールの大きさがこの作品には具わっていると言えるのである。

ではヘミングウェイに「個」の世界からの脱出を促したものは何であったのだろうか。言い換えれば『武器よさらば』と『誰がために鐘は鳴る』との間に、ヘミングウェイにどのような変化があったのだろうか。一九三〇年代のヘミングウェイについて、次に考察しなければならない。(未完)

## テキスト

Ernest Hemingway, *For Whom the Bell Tolls* (New York: Scribner's Sons, 1940) 引用文末尾の漢数字はテキストのページ数を示す。日本語訳は大久保康雄氏の訳を使わせて頂いた。

## 註

- (1) 中島顕治『ヘミングウェイの考え方と生き方』(弓書房 一九八三年)一二三頁。
- (2) Ernest Hemingway, *Farewell to Arms* (New York: Charles Scribner's Sons, 1929), P. 185.  
日本語訳は大橋健三郎氏の訳を使わせて頂いた。
- (3) 中島顕治『ヘミングウェイの考え方と生き方』一二七頁。
- (4) Angel Capellan, *Hemingway and the Hispanic World* (Ann Arbor: UMI RESEARCH Press, 1977), P. 256.